

岡田甫校訂

誹風柳多留全集十

自別篇中 至三四篇

三省堂刊



誹風柳多留全集 十

定価 五八〇〇円

昭和五十三年五月十五日 第一刷 印刷
昭和五十三年六月一日 第一刷 発行

校訂者 岡田 甫（おかだ・はじめ）

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

発行所 株式会社 三省堂

〒一〇一 東京都千代田区神田神保町一の一
電話 東京（〇三）二九三―三四四一（代）
振替口座 東京六一五四三〇〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

誹風柳多留全集十

目次

誹風柳多留

別篇・中	一
別篇・下	三
百二十二篇	四
百二十三篇	五
百二十四篇	七
百二十五篇	一〇
百二十六篇	一三

百二十七篇	二五
百二十八篇	一七三
百二十九篇	二〇一
百三十篇	二三三
百三十一篇	二四五
百三十二篇	二五五
百三十三篇	二六七
百三十四篇	三〇七
第十卷編集メモ	

柳
多
留
別
篇・中

天保四巳年刊

毘沙門
三箱評

其時の岩戸もかくや明の春
和の富貴螢雪で讀儒者ハ無し
米の恩いたゞく注連の門飴
名は鎖慈悲ハくさらぬ愛宕山
心無し盆画の不二を翌見村
水潛る紅葉かみよもきかぬはり

……〔別中・1〕

光明^{くわうめい}耽^{たん}くとして今日早仕舞
那智の瀧二度白簾をさらし上ヶ
三助の見る湯加減も片手わざ
鶉や驚て碁程に囲ム濱社
掃溜^{さうりゅう}の堀出^{ほりだ}シ物はかた木也
送^{おく}レ毛ハ捕り立を油てし
鼠鼻緒か下前の裾を喰イ
庭にさゝ波かき餅の反リ加減
法性寺入道形^{りて}て毬をつき

催主
今人
山

三輔
乙テ
蝶輔
刀我
今人
巨眼

桺糸
桺泉
株木
佃^{いり}糸
桺糸
花菱
全
三輔
集馬

投鞘ハ轆轤首の御提髪

お合酌坊主の天窓撫るやう

繪に書くと兔木賊に月ほつこ

百合の荅ハ振り上ヶた杵のやう

感吟
髭面^{ひげ}毛はけ藥を尋てる

小刀^こと粘^{のり}ハ矢立の杵と腮

近眼の磁石からくりを覗くやう

膝^{ひざ}の意名ハ小僧たの頭たの

囃^{はやし}の茶碗薩^{さつ}广さま御紋

……〔別中・2〕

墨壺ハけらの手足を取たやう

手療治て下女あか切を三針縫

寮の梅ヶ枝短冊にむし鰯

居風呂の釜道鏡の兜形

脇
夜軍の大敵鼻の馬印

大尾
ふつくりと出來た女房の水加減

布袈
醜郎評

實に智者ハ水を樂しみ五湖へ避
水潛る紅葉神代もきかぬはり

全
全
麴丸

芝鶴

奈丸

竹賀

集馬

麴丸

桺泉

竹賀

龜丸

株木

山笑

今人

和國

巨眼

全

(1)

袋から出るも目出度イ弓はしめ
 三味せんの駒もいさんた櫻胴
 朝湯の源太早咲の一騎駈
 西陣ハ糸て織出すかきつはた
 古雅たと譽る梨子壺の哥撰式
 榧から栗ハ蓬來のさゝれ石
 鞍馬の奥に葉隠レの児櫻
 藝の妙かくへき恥を血で雪キ
 八下り姉の都へ袴垂レ
 ……【別中・3】
 風流の意味に青桃能く熟し
 居酒屋の軒ゆて鮪の削り懸
 伸ヒとする春の巨燧の蝸牛
 猫の伸ヒ尺取虫に脊を立る
 たわしの武者で楠ハ智をみかき
 業平をみこて釣てる筒井筒
 天機能く小町敷嶋洗イあけ
 ダアといふ身て引上ル管あみ
 お玉杓子ハ幽霊のうしろ髪

如 扇
 柳 泉
 花 菱
 三 箱
 悟 昔
 三 輔
 鼠 六
 如 水
 團 石
 柳 泉
 巨 眼
 乙 テ
 麴 丸
 株 木
 花 菱
 稚 竜
 三 輔
 石 丈

裸でも遣ろふ親分初節句
 海老ヶ門番龍宮の松の内
 下手か語て反吐の出る生酔場
 裏を返して左官屋ハ泥にしみ
 泣つけた顔とハ見へぬ松の札
 はやり目の手ぬくい紅絹の夷紙
 夫婦して朝からちきる安餅屋
 血か出ると鼻の穴にもはさみ紙
 婆ア鮎見るもいやたと嫵きらい
 ……【別中・4】
 大尾
 息子の高依手毬から足を付
 寿老人
 如 扇 評
 御神苦と聞は着すとも喰すとも
 白鷺の羽かいを疊ム大手先
 積ク善の家に晦日の闇ハ無し
 折くは公家も來て寐ル天徳寺
 先の世を鳥渡見て來た持參金
 世ハ夢と教たまひし涅槃像
 山本ハ茶にされないと越後勢
 イ(七九)

三 朝
 コセキ
 株 木
 花 菱
 三 輔
 ベ 丸
 舛 丸
 喜 月
 三 箱
 蛙 柳
 如 水
 黒
 よしほ
 十九丸
 國 守
 醜 郎
 全

御後悔根津よき忠にお目か覺

年明ヶを母ハ蕪生の心もち

藥札の催促前を度ミ通り

文使女房か留守て飯も喰イ

奪レぬ人の寶ハ智惠袋

三利の波切作面のやうな顔

御手活の花に嵐ハ國家老

極堅イ奴ッか正月蚊をいふし

過分その御意豆ふ屋に分り兼

……【別中・5】

△身ともハ(二)〇〇
お勤と言われて身共ものかしら

極懇意米借り桶を持て行

鳩にさへ三朱の札と医者曰

一朱判斗ッたやうな土間の客

騎射笠ハ塩せんへいのそり加減

御愛妾御馬て鈴の音かとまり

大都會つまみ喰にも小判金

敵味方上総戸へはる秩父絹

粉に成て車力のさわく藥研坂

竹 賀

△ 山

雪 山

全

よしほ

三 箱

巨 眼

蝶 輔

いつみ

醜 郎 (二)〇〇、久
連也

三 箱

龜 丸

○ キ

山 車

芝 鶴

帆 布

忝 丸

集 馬

藏替をさせる流レの玉紬

二日酔凡天窓か四五貫目

踏メぬ帶能くく見れは山に雪

頗る酩酊福録壽千鳥首

大尾
しひんを六ッ炮爆を六ッ入

辨天
集 馬 評

御神詠角字を削るかなな文字

安倍と梶原文と武へ蒸る梅

堀返ス櫻鯛にも鋤や鰕

……【別中・6】

江之嶋の屏風波間に繪を拾イ

翌花見持髪迄もちらさぬ氣

握リ筆かすつて遣ふ毛延壽

百合の蒼ハ振り上ケた杵のやう

星を見て飛ンて見やれと親兔

燕の供厂的かひいらひら

梅本に目立繼穗の娘分

ほし見せハ蛤突上ケ窓榮螺

袋蜘蛛つんと手せまな獨リ住ミ

悟 昔

全

三 箱

柳 泉

いつみ

巨 眼

三 朝

帆 布

蝶 輔

いつみ

忝 丸

芝 鶴 (二)

驚 童

刀 我

柳 糸

千 之

巨 眼

息子との三日見へぬハ櫻かな

むし蝶ほと懸て干ス足袋の底

行余力あれハ豊後を習イに出

肉桂の薪まゝ事の釜の下

硝子びじろのやうに寐た子の取廻し

騎射笠ハ塩せんへいのそりかけん

湯花の焚木大根たの牛房たの

舞臺番噓のやうな聲を出し

六法を振るのハけちな奴風

……【別中・7】

銭田虫滑川程替女さかし

半虫へ紋を書てるてうちん屋

ヤイ南瓜我レも釣瓶を取氣たな

頗る酪酊福録ふろく壽千鳥首

紛失ふんしつの素二朱煙草の艸を分ヶ

女湯の流し時くこすられる

張り物て下女ハ戸板をつるませる

左加利サカて細工場をやたら出し

大尾オビ目を眠り息子持參の封を切

柳糸

花菱

帆布

三鼎

山

山車（5）

三輔

入（6）

柳水

巨眼

三箱

全

柳泉（6）

全

三朝

龜丸

蝶輔

巨眼

福祿寿
巨眼評

曲る玉いともかしこき神の國

鬼さへ泪剪釜の御仁言

養へかへる軍中て死ス茶師の忠

宇治の垢すゝき揚たる鞠子川

瀧口をしたいし義女も嵯峨の庵

天笔（7）の下に和合の花見連

酒宴を解した持越の再評義（8）

雨乞の俳師蛇の目の近所ニ居

……【別中・8】

奥迄ハ行かすに窓て日に黒ミ

明た耳啼ぬ鳥の聲も聞キ

樗ヒツクリ塚を見たらハ下りて呉棟フツナの木

酔も山の腰を巡ッて鱸皿

止（9）まかくと釣られたと馬氏吐鳴（10）

春の雪一句丸める内に消へ

煙草屋の障子にも伸ス舞の鶴

晒落（11）た子の日ハ三味線て松をひき

女房鬼女撞木屋へ迄聞に來る

刀我

集馬

侶（12）

乙（13）

株木

稚竜

柳泉

三鼎

柳泉

柳泉

三箱

集馬

山

株木

三輔

全

いつみ

花菱

井戸替への綱ハ深サを横に見セ

三助⁽²⁾が見る湯加減も片手わさ

むし鱈程懸てほす足袋の底

妙音の藝者も見ゆる寶舟

比類なき雜言をきく朝歸り

百合の荅ハ振り上ケた杵のやう

昔八丈竹馬の手にかゝり

新ら玉の春へ持越ス酒の借リ

吉兵衛ハ天麩羅て名もあけた店

……【別中・9】

雛の外女ハ立る物ハ無し

白蛇昇て禪をつむし風

物置て押の強イか水を上ケ

牛^{大尾}て夜軍木曾とのと長局

^{大黒}麴丸 評

簀付^(マ)の弓矢を守護に尉と姥

父母います内ハ仕立ぬ旅衣

横しまハ見へぬ孟母の機^(マ)の綾

奪^(マ)ぬ人の宝ハ智恵ふくろ

佃^リ

株木⁽¹⁾

花菱⁽⁷⁾

窓雨

玉守

芝露⁽³⁾⁽⁶⁾

花菱

乙^テ

錦袋

悟昔

黍丸

堅丸

醜郎

佃^リ

帆布

いつみ

よしほ⁽⁵⁾

御後悔天氣もはれず又勅使

經文ハ日和哥てハ雨を乞

にきくハ孫にもさせぬ彦左衛門

時くハ子の恩も着る妻か母

料理人頼^(マ)て伊勢屋氣をへらし

除夜の巨燵^(マ)に欲の無イ子の寐顔

米の思いたく注連の門かさり

籠てさへ飯と御膳ハ大違イ

糞⁽⁸⁾かへる軍中に死⁽⁸⁾ス茶師の忠

……【別中・10】

夜討迄能くからくりの糸を引

和漢の智人塀を釣り運を釣り

かた木な親父十露盤て薪を割

天^(マ)筆の下に和合の花見連

握^(マ)り筆かすつて遣ふ毛延壽

出た菓子を先の子にまつ女客

おぬし^(マ)外へ寐やれと戸を明る

養生に山のわらひも灸をすへ

酒をこやしに能ク作る李^(マ)伯の詩

竹賀

蝶輔

桺糸

山笑

玉守

花菱

今人

三朝

佃^リ (8)

桺水

十九丸

集馬

稚竜 (8)

黍丸 (6)

如扇

醜郎

全

錦袋

御心も解て氷を拜領し

白地の雪の先へ来る犬張子

浮^キ沈^ミ目見へ身請と摺^リ違^イ

戀の闇少將たらぬ人に見へ

鶯の餌程味噌する独り者

咳一ッ奥の笑イを家老留

夷紙めいた鯛の天窓つき

子も思ひかさねる鍋も又おもゐ

障子の切張り連くも骨の場所

……【別中・11】

二度行ぬ氣なら吉原いつち徳

而て後チにと儒者の節句前

我儘に五色の薦の紙細工

解ぬ帶結ふの神を祈りすぎ

毛引に遣ふ物尺の割下水

似氣なきハ頼兼公のドス言葉

奥中て高尾の顔^{が七}を待ほふけ

くら替の意見も馬の耳へ風

内福な公家衆隠居の左り笏

刀 我

佃^リ

巨 眼

三 箱

佃^リ

桺 泉

集 馬

如 水

帆 布

玉 守

高 麗

今 人

いつみ

帆 布

乙^テ

不^{ニホンハシ}老^セ (七・八)

如 扇

山

思ひきや佛か錢になろふとは

小金井ハ櫻小金の原ハこま

踏^メぬ帶能く見れハ山に雪

乗り懸の浮^イてハ沈^ム小松原

乙鳥の供鷹^{カヒイラヒ}的^ヒを弓^{ユミ}のさき

棒を吞そつたと鰻も腰をのし

草摺引に骨を折る藤間の子

あらそいに角たらい出^ス紫震^{ムラサキ}殿

たまかして鉋^{ノミ}丁^{バネ}を板^{イタ}クさしみ皿

……【別中・12】

菓子^コの折櫻の皮のはさみ帶

輪^ワ饒^{ニギハヤヒ}の親を出しとく煙印

繁昌^{ハナカサ}サ壁とくか耳こすり

あまいは虎屋にかいのも虎屋也

わたを板^{イタ}キ^タ給^{タマフ}細魚^{ホシノサカナ}の仕立はへ

塩引のちりけをかちる居^イハ

浮草に戸迷ひをする馬鹿な龜

尾を振^ハッて寄生醉の見せひらき

婚礼を女郎賀^{ヨロギ}したりキョ^{キョ}ッたり

十九丸

一 安

三 箱 (六)

山

刀 我 (六)

三 輔

錦 袋

鈍 成

如 扇

鸞 童

集 馬

いつみ

一 安

千 之

全

通 雅

十九丸

玉 守

馬士晝寐馬つくねんと立て居る

^脇御客にならす客分にして置す

^{大尾}勘當の錠かおりて後路治の番

同 番 外

膝の子も語りそれから藝盡し

帳尻も言はず語らず御慶也

^(昔)飯りた子を返しに行ハ笑(愚?)穴

天氣迄美女いふ形リの哥の徳

嶋めぐり仕て朝比奈の切通し

……【別中・13】

二月酔凡天窓か四五貫目

たんくゝと音のひそまるとろゝ汁

餅の足ゝ賀の強イ高足駄

ほし見せのひふせにも成ル正一位

名代の新造きせるを簾にかまへ

和の富貴螢雪て讀儒者ハ無し

水際のとつ程洗ふ哥の論

梅か枝に小よりを残ス春の雨

寒イ咄しハ豆腐屋の中から出

全

株 木

三 箱

稚 竜

三 輔

稚 竜

玉 守

蝶 輔

悟 昔 ⁽⁶⁾

三 箱

一 安

稚 竜

花 菱

乙 ^テ ⁽¹⁾

三 箱

里 鳥

山

板塀ハ虱絞りに釘をうち

せつば詰ッて五六間家鴨飛ひ

霧の梔母ハこほした餌を拾イ

日の初メよこれぬ口の初鳥

波に浮く鳥居ハ月の鏡立

^(大い)牽頭医者他家に無類な法を書

ちッほけな舟にとらたの牽頭たの

物置の伏勢下女へしッヶ嶽

焼餅を賞翫するハ若イ同士

……【別中・14】

手療治て下女あか切を三針縫

間男をする時局水をさし

^{大尾}うつゝ攻女房の有無の再吟味

^{惠比壽}川 柳 評

地響キかすると世界を天照らし

御神苦(と)を聞は着すとも喰すとも

武士の會稽諸麻(床?)て五ッ時

入札の諸侯も忠ヲもとめかね

元日の心年中持ッならは

奈 丸

醜 郎

春 月

三 箱

花 菱

集 馬

玉 守

巨 眼

如 雪

龜 丸 ⁽²⁾

蝶 輔

巨 眼

三 輔

如 水 ⁽⁴⁾

乙 ^テ

佃 ^リ

三 輔

諸卿皆青公家にして御壽散

正法の不思議^マハ峯の十三支

打上ケに召御領地に片男波

毛唐人てもあんまりな詩の白髪

四海波靜な御代の濱の松

義に猛^キ爺と鳥居へ御落涙

一ッ對の孝子和漢に鯉と瀧

三教も落れは同じ道五ッ

忘れて名高^キ鐘の中桑の畑

……【別中・15】

御出陣無きかと栗生遊^イ顔

異國本朝割り込^ミのたから船

極樂ハ見たい所たか行氣無し

二日出の猪牙舟宿のたから船

年^ノく^ニに田の畦瘦る欲の鯁

ナアル程みのひとつたにな^アる程

年の灘大船に乗るい^ハ仕舞

鼻紙へ一の字を書^キ奴の酒

御全快小普請入のからす猫

集馬

窓雨

蛙柳

旭浦

酒好

柳泉

株木

帆布

巨眼

丸

柳泉

醜郎

千之

丸

鼠六

佃^リ

如扇

柳泉

意地かわるそう無利之助強右衛門

水潜る紅葉神代もきかぬはり

夜^ルの鶴都の鳥に子を尋

編笠の頃にハ土手も馬煙^リ

懸^リ人春もおします暮したり

なかんつく女郎杯はと伊せや言

白箸ハ今朝の雜糞の二^タ柱

袖口の笑ッているを母しかり

靜^ッかに行なと目高賣おしへ

……【別中・16】

うつゝ攻女房の有無の再吟味

代脉の因果今日不出來なり

糠を掴^テ送^レ毛を娘たのみ

^{感吟}息子との三日見へぬハ櫻敷な

蒲鉾て飯を喰^テる筏乗り

無^セうさな蜜書火鉢の灰へ書^キ

かた木な親父算盤て薪を割

焼泥鰻ハ腮のあたりてヒ加減

酔も山の腰を巡^ッて鱸皿

巨眼

全 (1)(2)

三輔

十九丸

山

玉守

乙^テ

今人

玉守

巨眼 (14)

玉守

柳水

柳糸 (7)

早牛

佃^リ

集馬 (10)

虎丸

山 (8)

舞臺番くしやみのやうな聲を懸出し(?)

思ひきや掛取明て來やふとは

雪の梅紫蘊に衣をかけたやう

七福の壽のお二人りに様付す

伊せ屋の隠居鼻紙を火取ッてる

借りた子を返しに行ハ笑(笑)イ売(売)

ほつたて尻て立服の缺虫

湯花の薪大根たのンや牛房也たの(?)

ひとい奴ッ公家を縛ッてふち殺

……【別中・17】

つく錢の中にきせるの晒落(つ)こうへ

新尼を張りに行ふと嵯峨の民

ヲヤ七分針箱はたり茶の支度

蛸(蛸)の足半分程ハ土ふます

暮の嫩(嫩)榮若にしてハ角か無し

葱の根ハくゝり袴をはいたやう

墨壺ハ螻(螻)の手足を取ッたやう

道端へしやかみ咄をほしつてる

おぬしマア外へ寐やれと戸を明る

入こ ①

三 輔

株 木

雅(雅) 竜

全

全 ⑬

桺 泉

三 輔 ①

堅 丸

悟 昔

巨 眼

如 扇

三 輔

窓 雨

集 馬

竹 賀 ②

十九丸

醜 郎 ⑩

豆を煎りくふつ懸サく

下駄かけてひつこかたくり買に行

塩引のちりけをかちる居い

そこか魔所引手の穴か物を言

松茸(松茸)の板売斗リ松ヶ岡

持上ヶなから聞だよ(おど)く

象の毛の赤イ差毛に普賢(普賢)稔

下手ならは下手で濟のに下手ッ尿

丸藥を手のひらて解く面白サ

……【別中・18】

さつし入過て女房寐付れす

馬脳にたこ引ッ掛ッたて泣出し

門院大尾の御不慮入水の外に濡

(以下空白)

乙テ

山

千之 ⑫

如 水

不ニホン老

三 輔

刀 我

いつみ

雪 山

玉 守

堅 丸

巨 眼

眞砂月並卯六月開
兼題驛路
芝大木戸叶泉額面會

催主
三通
箱人

通雅評

五十三登れハとく雲の上

名僧の泊り池鯉鮒を除て行キ

鶴一羽肩からかたへ五十三

武徳ハ耳塚文徳ハ筆の塚

見ぬ人の耳へも響く三井の鐘

東海の外に五道の日本橋

日坂へ來て兄弟の物語り

……【別中・19】(1)

京の辻番武鑑にハ百人一首

玉櫛箱箱根に並ふ文庫山

秋のたひ脚半も露の千草染

淀を乗る舟ハ景色を引き道具

上京の座頭ゑんぎに撞木町

くりからの彫物目立木地の簍(わく)

極暑の旅人雨の山雲の山

大森で野郎變生女子と化シ

旅なれぬ同者(二三)むす子酒川の水に醉

稚竜

花菱

英

醜郎

元住

玉守

醜郎

稻丸

三輔

稻丸

元住

通人

三朝

通古

芦ノ屋

通喜(二三別・22、通喜)

いそかすハ呉れましものを酒の代

手水鉢ほと盆山の立場茶屋

魯智深も武松も泊る木賃宿

三嶋鱸のそはにある三椒魚

行燈へあなこと書て客を釣リ

芋堀(マ)も鞠子てはつむとろ汁

古市の廊下美人の土俵入り

そこくらて鑄掛て元の釜と成り

大尾白雲の帶解く不二の素肌見へ

……【別中・20】(2)

種蔕評

日とあらたてらす山田の御神鏡

要害の山に自然のかぶと石

けふハ伊勢あすハと母の旅ころ

ありかたさ鬼もせうきに成る御山

御代のたひ一宿あとに具足櫃

入水せぬ雀桑名てちうと逃

女旅伊勢路の馬の姦しさ

巨勢付ひた繪師金澤て筆を捨

玉守

通澁

十九丸

花菱

種蔕

光女

稻丸

三橋〔拾三・24〕

松波

松波

桺泉

眞住

扇橋

三朝

百々爺

友和

今人